



バアルの預言者 450 人をたちの祈祷活動は空しく終わった後、エリヤは自らの祈りのために準備をしました。12 の石を用いて祭壇の建て直しをし、12 セアの種を入れるほどの溝を掘ったのです。その上で、たきぎを並べ、雄牛を屠って全焼のいけにえとしてささげました。また三度にわたり、水を注いだのです。

1. エリヤの祈りは用いられ (36~39 節)

①エリヤの祈り (36)「ささげ物をささげるころになると、預言者エリヤは進み出て言った。『アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかになりますように。』」いよいよエリヤの祈りが始まりました。アブラハム、イサク、ヤコブの神である主を呼びかけての祈りです。エリヤは主を主とするという原点に立ちました。そして、自らは神のしもべであることも告白します。そして、これまでなされてきた奇跡も、これからの出来事も、すべてが主の御言葉にもとづきながらなされているということが、誰の目にも明らかになるようにと祈るのです。つまり、栄光のすべてが主にあるようにと祈ったのです。

②民が神を知るように (37)「『私に答えて下さい。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようにしてください。』」そして、エリヤは「私に答えてください」と率直に祈ります。さらに、バアルの神を奉ずるアハブと預言者達に従っている民が、その心を創造主なる神に向き直し、主こそがまことの神であることを知ることができるようにと祈るのです。

③火が降ってきて (38~39)「すると、主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしました。民はみな、これを見て、ひれ伏し、『主こそ神です。主こそ神です。』と言った。』」その祈りに主は答えてくださいました。主の火が降ってきたのです。そして、祭壇上の全焼のいけにえ、雄牛とたきぎ、石、ちりを焼き尽くしたというのです。それほど火勢だったのです。それゆえに、掘られた溝の水も蒸発するほどでした。それは圧倒的な主のご臨在を感じさせる出来事であったでしょう。民はひれ伏しました。そして「主こそ神」を連発したのです。

2. バアルの神の預言者達とエリヤ (40~42 節)

①キシオン川において (40)「そこでエリヤは彼らに命じた。『バアルの預言者たちを捕らえよ。ひとりものがすな。』彼らがバアルの預言者たちを捕らえると、エリヤは彼らをキシオン川に連れて下り、そこ

で彼らを殺した。」ここにある記事は、現代に生きる私たちには、読み飛ばしたいところでしょう。いくらバアルの預言者だとはいえ、あまりにも厳しいのではないかと。申命記 17 章 2～5 節を見ると、偶像礼拝への強い戒めとしての石打ちのことが示されています。あの姦淫の女に対して、「わたしもあなたを罪にさだめない」と言って、ただ一人石打ちができたイエス・キリストがそれをなさらずに赦されたことに注目しましょう（ヨハネ 8 章）。とはいえ、偶像礼拝の根本が人間中心であると学んだ私達は、神信仰から目を惑し、信仰を人間のレベルにしてしまう愚を戒めましょう。

- ②行って飲み食いを (41) 「それから、エリヤはアハブに言った。『上って行って飲み食いなさい。激しい大雨の音がするから。』」 どうしてエリヤがアハブに飲み食いを勧めたのでしょうか。断食をしていたからでしょうか。エリヤにはもう雨の音が聞こえていたので、その時は来たと告げているのでしょうか。バアルの預言者達をさばき、バアル信仰を進めるアハブには飲み食いをせよと言わせた主のご真意はどこにあるのでしょうか。
- ③エリヤはひざまずき (42) 「そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。」ともあれ、アハブ王は飲み食いに出かけました。一方の、預言者エリヤはカルメル山の頂上まで上り、主の前に出させられたのです。「自分の顔をひざの間にうずめ」は謙虚さを現わします。

3. 大雨が降る (43～46 節)

- ①海のほうを見て (43) 「それから、彼は若い者に言った。『さあ、上って行って、海のほうを見てくれ。』若い者は上って、見て来て、『何もありません』と言った。すると、エリヤが言った。『七たびくり返しなさい。』」若い者たちに、海のほうを見に行かせます。なぜならば、もう雨が降る時が近いことは主に知らされていたからです。何もないと言われても、エリヤは七たび繰り返せと行って、何度でも繰り返して様子を観察するように、彼らに命ずるのでした。
- ②七度目に (44) 「七度目に彼は、『あれ。人の手のひらほどの小さな雲が海から上っています。』と言った。それでエリヤは言った。『上って行って、アハブに言いなさい。《大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。》』」七というのはイスラエルでは絶対数です。七度目になって、若い者の報告がなされます。人の手のひらほどとも見える小さな雲が海から上っています。エリヤは言います。それが、雨をもたらす雲だと思ったエリヤは、アハブ王に使いをやります。「大雨に閉じ込められないうちに、車を使って下っていきなさい」というメッセージでした。大雨になれば道が閉ざされて交通ができなくなるかもしれないからです。

- ③濃い雲と風で (45～46) 「しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗ってイズレエルに行った。主の手がエリヤの上を下ったので、彼は腰をからげてイズレエルの入口までアハブの前を走って行った。」空はにわか雨が降りそうな様相です。濃い雲と風。そしてついに、激しい雨が降り始めました。アハブ王は大慌てで、車に乗ってイズレエルに向かいます。エリヤはアハブより先に進みました。ここに主なる神の優先が示されています。

《結論》 今朝の聖書箇所には三つの大きな出来事が記されています。第一には祭壇に火がついたということ。第二にはバアルの預言者達に対する戒め。第三には大雨が降り始めたという出来事です。この三つから学びます。

第一に、バアルの預言者たちが 450 人の総力をもって呼びかけても、祭壇に火はつきませんでした。が、エリヤが祈ると火が降ってきて祭壇といけにえを燃やし尽くし、溝の水をも蒸発させるほどになったというのです。エリヤに注目するならば、彼が創造主なる神の前に謙遜に立たせられて、神のしもべとして信じて祈ったという点が用いられたということが言えるでしょう。一方ここから私たちは、神は力に満ちた方であることを覚えたいのです。御力に満ちた主なる神が祭壇に火をもたらし、人間の支配のもとにあるバアルの神とはっきりと区別されているということです。ここにまた、預言者エリヤと主イエス・キリストの違いも覚えておかねばなりません。イエス・キリストが水をぶどう酒にし、嵐を静められなどの奇跡をされました。イエスが神だからです。エリヤは人ですが、その祈りが用いられて事が起こされたのです。力ある神と、その神によって造られた人間の違いを明確に覚えましょう。

第二に、バアルの預言者達がキシオン川に連れて行かれて、殺されたという点です。私たちはここに峻厳なる神の御手というものをみます。偶像礼拝を推進する預言者たちに対する、妥協のない主の御手がここに示されているのです。ノアの洪水の後に主は「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい」（創世記 8:21）と言われてるように、主のさばきは、そう滅多におきるわけではないのです。私たちがこの出来事から学ばなければならないことは、終わりの日がここに暗示されているということです。40 節の内容を見ておそろしい思った人は、主なる神を侮って歩むならば、主は厳しいお取り扱いをなさるということ覚えることです。今こそ、主の前に悔い改めをしたいのです。

第三に、46 節の、大雨となったという出来事から、主の大いなる恵みを学びたいのです。17 章 1 節において、雨が降らなくなることが告げられ、それは現実となり、大地は渴き、飢饉もやってきまし

た。アハブ王はもちろん、民もそのことで困り果てました。2～3年の間、雨が降らないという事態から、雨が降ったということは、ただ恵みというしかありません。恵みの雨がもたらされるということは、私たちの歩みの中にもあります。雨が降らずに、貯水池の底が見えるほどになることがあります。水がなくなれば、人は生きることはいけません。雨は主の恵みです。また、私たちの魂の渇きを覚えることがあります。これは外から見えることではありません。サマリヤの女に対して、主は生ける水について教えられました。そして、いわれました。「この水を飲む者は誰でも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」(ヨハネ 4:13～14)。この恵みの水を、私たちはいただいきたいのです。この水をいただいてこそ、私たちは本当の意味で生きることができるのです。